

第7章 協議体の協力による地域生活課題などの把握

1 協議体からの意見

地域生活課題を明らかにし、地域福祉計画に反映させ、解決に向けた取組などを進めるため、米川地区、久保地区の協議体を中心にして、地域生活課題に関する項目の意見をいただきました。各協議体において話し合いを続け、地域の課題を解決する仕組みの創出に繋がります。

※協議体に依頼した時点での基本目標や基本施策を記載。

米川地区ささえあい隊

- 1 開催日時 令和2年7月13日（月）19時から
令和2年8月5日（水）19時から
- 2 開催場所 米川公民館
- 3 参加人数 9名

（障害や子育てに関する意見を得るため、協議体以外の人に参加を依頼し2名参加。）

基本目標1 地域共生社会の実現に向けた福祉意識の醸成と環境づくり

★基本施策1 支え合い意識の醸成

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★隣近所がお互いに高齢者であり、ひとり暮らしや足腰などに不自由さを感じている人は外出を避けるようになっている。
- ★各地区の距離が離れているうえに、各地区の人口が減少している。
- ★米川小学校の休校により学校行事がなくなり、交流の場が減少した。休校に伴い、子育て世帯と高齢世帯の交流も減少した。
- ★住民の状況については把握しやすいものの、自ら周囲との交流を疎遠にしたため孤立するという状況が発生している。
- ★若者は仕事のために地域行事に参加する機会も少なく、世代間の交流も疎遠になっている。
- ★支え合うことの大切さが浸透しない。
- ★共稼ぎ世帯の増加、生活スタイルの変化による地域離れを危惧している。
- ★交流が希薄している。家の外に出ることが少なく、地域の人々の生活感が見えない単身世帯や高齢者世帯の孤独や孤立が気になる。
- ★高齢者の施設入所、入院、家族葬の浸透などにより地域の繋がりが途絶えている。

- ★見過ごしている独居の人や引きこもりの人がいるかもしれないので、思い込み過ぎず、現状を把握する努力が必要である。
- ★新型コロナウイルスの影響により、色々な催しやボランティア活動が無くなり、以前にも増してコミュニケーションが取れなくなった。
- ★米川公民館や老人集会所で交流を図っているが、限られた人のみの参加になっている。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★地域行事にできるだけ参加し、顔を合わせたらしっかりと会話をする。
- ★同じ自治会、隣近所の人々と積極的に付き合う。
- ★清掃作業やボランティア活動の参加協力と地域住民の交流による介護情報などの提供で繋がりを深めていく。
- ★近所付き合い（あいさつや井戸端会議）を心掛ける。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★地域全体で取り組むことのできるイベントなどを継続し、その中で世代を超えた繋がり、気軽に参画できる雰囲気形成する。
- ★地域の行事を少人数でも良いので行う。
- ★民生委員・児童委員、自治会長、近隣の住民で声を掛け合い、交流を図り、見守り支え合う関係を築く。
- ★気軽に集まりやすい呼び掛けをする。

★基本施策3 支え合いの地域活動の推進

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★「米川あったか便」やボランティアグループによる配食サービスのような地域での見守り活動が行われている。これらの活動を支えている者も高齢化しつつある。
- ★米川は山で隔てられた集落がほとんどで、地元だけで支え合うことが困難な地域が多い。
- ★米川地区ささえあい隊において、高齢者などが必要な手助けを調査しても、意見が出ない。必要な手助けを個人対個人の間で解決する方向にある。
- ★今までは、お互いが集まり近所同士の情報を得ていた。外出が難しくなる日常が増えることにより、皆が集まり行動すること自体が難しくなる。
- ★さまざまな課題に対し、関心を持つこと、集会を持つこと、意見を出し合い協議すること、参加協力していくことの体制ができていない。
- ★米川から離れて生活している家族を持つ人が多い。
- ★どの地域でどれだけの人が不自由な生活を送られるのか把握できず、手助け

できていない。

- ★ひとり暮らしになると、日常生活の困りごとにも徐々に増えていく。夏場は家の周りの草刈などの要望が多くなる。
- ★「地域活動は金にならないから参加したくない、他人のための活動をしたくない」という考え方の人が社会全般に見受けられる。
- ★子どものころから、社会活動の必要性についての教育が必要である。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★「集まる」から「出向く」スタイルに変化する。
- ★家族や親族同士で連絡を密にする。
- ★近隣の人への安否確認の声掛けや相談相手になるなど、一人一人が目配りをする。気になる人がいれば、市職員、民生委員・児童委員、自治会長、地域の人などに相談する。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★米川地区ささえあい隊の活動として、高齢者などが必要としている手助けを調査する。
- ★自治会などからの配布物は、一軒一軒訪問し、声を掛けて配布する。
- ★地域で声を掛け合い、日常生活を送ることが難しくなった人や手助けを必要としている人がいれば、どのような支援が必要か皆で考え行動に移す。

★基本施策4 地域福祉の拠点整備

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★小学生低学年と高学年でスクールバスの運行時間が異なるため、低学年の子どもが一人で帰る場合、サルなどに遭遇し被害に遭うことが心配なので、米川に子どもが一人で待てる場所があると良い。
- ★公民館に自習室を設けるなど、自主的に勉強できる公共施設があると良い。
- ★中学生や高校生の移動手段がほとんどない。
- ★足の不自由な人、車いすを利用する人が使いやすい施設、トイレが少ない。
- ★米川にさまざまな活動拠点はあがるが、繋がりが無い。それぞれの力が協力し合えるシステムが必要である。

基本目標2 地域福祉を担う人材の育成と団体の強化

★基本施策1 地域福祉活動を推進する人材の育成

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★活動を担う人が固定化・高齢化しており、若年層は仕事に縛られて活動に積

極的に参加できない状況にある。

- ★福祉的な活動への関心度は低く、各組織が既存の体制では、今後、維持すること、連携すること、担い手になる人材の確保は困難な状態にある。
- ★地域福祉を支えている人々から順に若い世代へ引き継ぎたいが、その中間層の人が地元におらず、他県などに出ている。残っている若い世代も仕事があり、世帯数も少ないので、なかなかスムーズにいかない。
- ★若い人は忙しく、動ける人は再雇用などで仕事がある。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★地元で生活の拠点を置く。
- ★自分の得意な分野で地域福祉のお手伝いができるよう声を掛け合い、地域活動に参加する意識をもつ。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★福祉活動などの地域ボランティア活動への参加にも目を向けやすくする環境づくりをする。
- ★近隣でコミュニケーションをとり、若い世代の人でも地域で活動できる場や機会をつくり、参加して意識を高めていく体制をつくる。

★基本施策2 ボランティア活動への参加の促進

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★米川地区ではボランティア活動が結構盛んであるが、活動を支える人が一部の人に集中しており、固定化・高齢化している。
- ★新型コロナウイルスの影響で活動を休止している。
- ★米泉湖周辺の植樹された木を剪定する人も高齢となり、また、人数が減り、将来が不安である。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★地元で生活の拠点を置く。
- ★ボランティア活動の楽しみを見つけ、地域の人たちと情報を共有して、ボランティア活動の環境について相談・整備し、関心をもってもらう。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★参加しやすい活動に多くの人の参加を呼び掛ける。
- ★有償ボランティアの導入を検討し、活動の輪を広げる必要がある。
- ★ボランティア活動に対する環境の整備、情報提供をし、活動の活性化を図る。

★基本施策3 地域福祉に取り組む団体への支援

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★金銭的な支援があったとしても、自由な活動に対する負担や制約にならないようにする必要がある。
- ★高齢化が進み、担い手の確保が難しい。現在の活動を引き継ぐことが重責に感じられている面もある。
- ★米川には3つのいきいきサロンがあり、グラウンドゴルフ、日帰り旅行、お茶会、レクリエーションなどで楽しく活動している。誰もが楽しく集まれる“地域の輪”が続くようにすることが重要である。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★自治会の活動への参加や自分に合う団体への活動支援。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★活動の継続や活性化が難しくなっている団体への支援や見直し。

基本目標3 健康で安心して暮らすための支援体制づくり

I 包括的な相談・支援体制の整備

★基本施策1 生活課題に対応する相談・支援体制づくり

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★米川地区ささえあい隊の活動をモデル地区に限定して行っているが、範囲を全域に拡大しなければならないものの、人材が不足している。
- ★相談・支援体制は、高度に専門性を有するので、地域では難しい。
- ★もしものとき、困ったときに「〇〇のことは誰に、いつ・・・」など、相談すれば良いか分からない状況にある。
- ★高齢者は「言えば迷惑を掛ける」などと遠慮して連絡すらしないことも考えられる。
- ★地理的には各地区の距離が離れ、今後、ひとり暮らし高齢者がさらに増えることと予想されていることを考慮すると「集まる」ということが難しくなる。巡回訪問型相談窓口などの設置が必要である。
- ★民間事業者による見守り活動や安否確認などができる体制の構築が必要である。
- ★支援が必要な人が相談に行ける場所が出張所だけなので、大変なときに相談に行くことができないことも多々あると思われる。
- ★米川は比較的高齢の人でも元気な人が多いと思う。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★生活の中で気が付いたことがあれば、いろいろな人や団体に情報を提供する。
- ★日頃から健康に気を付け、保健指導などを利用する。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★地域単位で、高齢者、障害者、子育て、防災など、色々な事柄に対しての窓口（連絡先）があれば良い。
- ★地域の実情や地域に暮らす人を知り、交流を続け、「どのような手助けを必要としているか」などを知ることが重要。
- ★日常生活でつながっている人の連絡を生かし、さまざまな場面で活用する。
- ★プライバシーを守られる信頼関係を築き、あらゆる相談事に対応できる体制を築く。

★基本施策2 見守り活動の充実

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★日常生活における会話、スーパーや生協による移動販売サービスでの会話なども地域での見守り活動になっている。民生委員・児童委員による見守り活動も役立っている。
- ★農作業をする人の減少に伴い、日中外で活動する人が減少している。それに伴い、近所付き合いや自然な見守りが少なくなっている。
- ★民生委員・児童委員や地域の人が把握しており、何かしらの支援をしていると思われるが、より安心してもらえるような関わりが必要かもしれない。
- ★76歳以上のひとり暮らしの人に、月1回、直接お弁当を手渡ししているので、安否確認もできている。お弁当を作る人も高齢化が進み、新規加入者も少なく、今後の活動に不安を感じている。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★いろいろな場面で人との繋がりをつくることで、見守り活動をしやすい必要がある。
- ★見守り活動を充実して、変化に早く気付く。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★近所同士でおしゃべりすることが大切である。
- ★民生児童委員と民間事業者との多様な連携づくりなど。

★基本施策3 認知症の人や家族に対する支援の充実

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★認知症の高齢者などを抱える家庭では、まわりに支援を求めにくいこともあり、家族の負担が大きくなっている。
- ★米川には「のんびり村米川」があり、住民との交流も盛んである。入居できる施設が近くにあれば安心である。
- ★日中見守りができず、徘徊などで命の危険にさらされるという心配がある。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★地域での見守り活動が重要である。
- ★認知症の症状、支援の方法などを学ぶ講座を開催するなど、認知症に対する理解を得る必要がある。

基本目標3 健康で安心して暮らすための支援体制づくり

II 自分らしく生き生きと暮らせる体制づくり

★基本施策3 社会参加の促進と生きがいつくり

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★子育てをしているときのまわりからの声掛けや誘いは、とても励みになりますが、無理強いにならないようにする必要がある。
- ★米川児童館の閉館により、子育てをする若いお母さんの交流場所が無くなった。近くに気軽に行ける場所があれば、育児に関するストレスや不安などが少しは解消できる。気軽に集える交流サロンが必要なのではないだろうか。
- ★各種スポーツをする機会は地域ごとにあるようだが、あまり知られていない。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★無理強いにならないように、相手の人が選択できるようにして催しなどに誘う。
- ★一人一人が興味のあるものに積極的に参加する。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★米川小学校の休校に伴い、レクリエーション教室やスポーツ大会などの機会が少なくなる可能性があるため、環境を整える必要がある。

★基本施策4 生活のニーズに応じたサービスの提供

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★あったか便が利用者からは好評であるが、通院のためには利用できない。
- ★コミュニティバスの米泉号が利用可能で、サービス内容、便数ともに優れているが、学生なども利用しやすいように改善する必要がある。
- ★米泉号は予約をすれば家の近くまで送迎してくれ、高齢の人にはとても喜ばれている。利用する人を増やすことが今後の課題である。
- ★市内を巡回するバスや移動販売車など、サービスがなく不便にされている地域があると思う。

基本目標4 災害に備えた避難支援体制づくりの推進

★基本施策1 要配慮者避難支援体制づくりの支援

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★米川地区は狭い山間部に集落が点在しているため、集中豪雨などによる土砂災害などが心配である。
- ★米川公民館では車いすの利用ができず、避難してもケアができる設備がない。
- ★地域全体がほぼ危険な場所であるため、避難場所に行くことも危険である。
- ★独居の高齢者も多く、一人の避難も難しい。
- ★広範囲にわたり避難行動要支援者がいると思うので、避難するときの支援は連絡の面でも大変だと思う。
- ★日頃から要援助者との関わりを持ち、どのようなとき、どのようなサポートをするか、できるかを考えておく。
- ★ひとり暮らし高齢者や高齢者のみの家庭が多く、近所への手助けは難しい。
- ★高齢者が多い地域なので、自助から共助へのスムーズな繋がりができるよう、自治会で初期避難場所や避難経路などを話し合っておくことが大事である。
- ★新型コロナウイルスにより、交流や助け合い、支え合いの活動が難しくなっている。感染拡大に注意しながらの体制づくり、仕組みづくりが必要である。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★自宅周りの危険個所の把握と、早め早めの対応を心掛ける。
- ★独居の高齢者が隣近所にいれば、声を掛け一緒に避難をする。
- ★行政からの避難勧告、避難指示などに従い、連絡を取り合い避難する。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★梅雨時などは、声掛けや事前の心構えについての話し合いを行う。
- ★自治会内で、集まれる家や場所を決めておく。

- ★災害時の近隣住民などからの支援を組み込んだ避難支援プラン（個別計画）を災害時のケアプランとしてつくる。
- ★ひとり暮らしの人の避難プラン（連絡網）をつくる。
- ★実際に体を動かして避難訓練を行う。地域ごとに危険な場所、安全な場所を実際に確認する。
- ★近所への手助けは難しいが、一言声を掛ける。

久保地区協議体

- | | | |
|---|------|----------------------------------------|
| 1 | 開催日時 | 令和2年7月29日（水）17時から
令和2年8月19日（水）17時から |
| 2 | 開催場所 | 久保公民館 |
| 3 | 参加人数 | 10名 |

基本目標1 地域共生社会の実現に向けた福祉意識の醸成と環境づくり

★基本施策1 支え合い意識の醸成

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★常時からの御近所交流・地域交流が大切である。助け合いは一朝一夕にできるものではないので、気軽に声を掛けられる関係づくりをどうにかして作れないかと思う。
- ★「大丈夫?」「助けて」が気兼ねなく言える、言える人がいる社会づくりを目指す必要がある。
- ★人と人との繋がり希薄化や支え合いなどコミュニケーションがとれない。
- ★居住地域により生活面、交通面においても利便性等の温度差があり、福祉の面も地域により違いがある。
- ★幼稚園2園の入園児が少なくなり、廃園となった。
- ★若いうちは自分のことばかりで地域のことには無関心、年をとっても地域のことは無関心であるが自分のことを支えてほしいと思う人が多い。
- ★近所の人入院や死亡が後日分かる。できるだけ話さないで事が済んでしまう時代になっている。
- ★家でずっと過ごされる人はどうしているのか、困っているのか分からない。支援を必要とする人がいても、何をしてほしい等、本人から発信があれば行動に移すことができる。
- ★良い意味での目配り、気配り、心配りができ、他人の困りごとを放っておけない人が増えると良い。
- ★社会の変化とともに、みんなで何とかしようという人が少なくなっている。
- ★久保地区には宅地が少ないため、人口が増えない。農地転用の簡素化など、宅地が増える対策が必要ではないか。
- ★小さいころから地域の行事などに参加し同郷意識を育てていた。地域に幼稚園が無くなり、これからは、小学校低学年から同郷意識を育むことになり、さらに地域を意識することが少なくなるのではないか。また、親のPTAや子ども会活動などが難しくなる。

- ★個人主義が蔓延し、個人情報管理が異常に強くなり、地域の繋がりが弱くなっている。
- ★他人に干渉してほしくない人が増えている。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★あいさつ運動の励行、個々のできることを率先して行う。
- ★班内で、井戸端会議や声掛けを心掛ける。
- ★地域行事やスポーツ文化への積極的参加をする。特に、自治会活動などで男性の参加が少なくなっているため、男性が気兼ねをすることなく、いろいろな活動に参加できる体制をつくる。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★子どもを交えて楽しい行事での三世代交流から始め、避難訓練などの実用的な行事へと徐々に移行していくことができれば良い。
- ★中学生や高校生が地域行事に参加する仕組みをつくり、人材育成や地域行事を活性化させる。
- ★一人がおせっかいをされると嫌われるが、みんなですれば楽になる。
- ★自治会や公民館活動を通して、コミュニケーションを図る。
- ★若い人が参加できる活動を地域でしっかり話し合い、地域全体の問題点を出し、協力をお願いする。
- ★リーダーシップを発揮できる体制をつくる。

★基本施策3 支え合いの地域活動の推進

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★各地区高齢化が進み若い家族が少なく、パトロール隊や自主防災組織なども高齢者が多く、若い人との交流が少ない。
- ★自治会の高齢化が進んでいる。
- ★三世代同居の家庭が少なくなっており、若い人が少ない。
- ★共稼ぎ世帯が多くなっており、近所付き合いが少なくなっている。
- ★自治会長が1年交代で、新しい事業に取り組もうとしない。
- ★葬儀を家で行うことがほとんどなく、皆で一緒に行動することがなくなっている。
- ★自治会名簿を共有することもなくなり、個人的に電話番号を交わす以外、連絡手段もなくなっている。
- ★町内清掃など、自治会行事への参加が少なくなっている。
- ★65歳まで働く人が多くなり、特に男性が自治会と疎遠になっており、近所の状況が全く分からない人が増えている。

- ★古い団地などでは高齢化が進んでおり、10年後を考えると支えられる人が多くなり、地域の支え合いが成り立たないのではないか。
- ★できるだけ長く働く人が増えており、仕事を辞めてからの地域活動が難しくなっている。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★行事を主催する側になる前に、参加する側として一步踏み出す。
- ★受け入れる側も参加しやすい雰囲気づくりをしなければならないと思う。
- ★日頃からの生活の中で助け合いをするように心掛ける。つとめて、隣近所の付き合いをする。
- ★自治会行事にはできるだけ参加する。
- ★日常的に挨拶を交わす。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★世代間交流も20年前ころまでは花見や盆踊りなどでしていたが、最近ほとんど減少している。地区内掃除などを計画し、できるだけ皆が参加できることをする。共同での防災訓練なども良い。
- ★久保地区に住む高齢者の方が、日常生活の中で困ったことがあったときに「いつでも気軽に相談できる場所」として松寿苑を活用していただきたい。

★基本施策4 地域福祉の拠点整備

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★公民館が中心、老人会なども地域によっては良くされていると思う。

基本目標2 地域福祉を担う人材の育成と団体の強化

★基本施策1 地域福祉活動を推進する人材の育成

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★久保地区のような昔からの地区であれば、古くからの知り合いだけに言いにくいということがある。地域によって、人によって、繋がりや度合いに強弱があるのではないかと思う。民生委員や福祉員などで、カバーしきれものではない。
- ★コミュニティ・スクールの取組で、地域とともにある学校づくりがされているが、関わる人も限定的である。子どもと地域の人との交流は増えても、その間の保護者世代が抜けている感じが否めない。
- ★地域福祉の担い手となる人材の固定化・高齢化が問題である。活発に地域活動をしているが、メンバーは大体同じ人が務めている。1人が10の事をす

るのではなく、10人が1人1つのことをする体制にしなければ、何事も先細りである。

- ★福祉に関して、民生委員は近所のことを把握しているだろうが、自治会長はあまり把握できないと思う。個人情報保護もあり難しいと思う。
- ★自治会長や福祉員が1年で交代する地域が多くなっている。
- ★さんさ踊りやふるさとまつりなどで、少しではあるが若い人との交流があり行事などを伝承しつつある。
- ★人材の育成は、個人では難しいので自治会や公民館などで取り組む必要がある。
- ★いわゆる親分肌的な人が少なくなっている。良いも悪いもあの人に頼んだら何とかあったということがない。
- ★身近に相談者がいることで安心して相談ができる。民生委員、福祉員の引き受け手がないと聞いている。
- ★毎年同じ人が頑張っていて活動しており、高齢化が進んでいる。
- ★地域活動に参加する人が少なく、どうしても一部の人に無理をお願いして何とかこなしている状況である。
- ★自治会も会長が毎年変わるところが多く、自治会として人材育成は難しいと思う。
- ★行事には参加するが、責任者にはなりたくないという考えの人が多。
- ★高齢化、人口減となっており、宅地を確保し人口を増やす必要がある。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★地域活動を少しずつでも積み重ねることが、後々の地域福祉に繋がる。できるときに、できることをするだけで、一歩が踏み出せる。
- ★やりがいを感じてできる活動から始める。やってみなければ分からないこともあるので、まず始めてみるのが大事である。
- ★興味を示してくれる人を探す。

★基本施策2 ボランティア活動への参加の促進

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★以前からボランティア活動は盛んであるが、後継者不足が深刻である。
- ★ボランティア活動に無関心な人が多いので、ボランティア活動が楽しくなるような環境づくりが必要である。
- ★ボランティア団体同士の連携が取れていないように感じる。
- ★中学生には積極的にお願いしていて、良い方向ができています。小学生にもできることはお願いして参加してもらっている。大人の参加がやや少ないと感じる。

- ★有償ボランティア制度の仕組みがあれば参加しやすくなると思う。
- ★経済的に余裕がないなどの理由により、親が子どもに習い事などに通わせたくても通わすことができない家庭があると思う。習いたいものが習える場所とそれを教えるボランティア講師が小学校区単位にいたら良いのではないか。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★個人、団体などが気軽に参加できる仕組みをつくり「いつでも、どこでも、だれでも」参加する。
- ★声を掛け、誘うことしかできない。
- ★人と人との出会いは色々な活動を通じて多くあるので、声を掛け誘っていきたい。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★自治会、地域行事も企画の段階から青少年が参加する仕組みをつくる。
- ★公民館や久保地区福祉協議会を中心に、啓発活動を進める。
- ★中学生や高校生へボランティア活動の提供をする。地域行事などへも企画や計画の段階から参加してもらう。保護者の理解も必要だが学校へも協力をお願いする。
- ★新型コロナウイルス感染が終息した後の協議となるが、松寿苑も施設開放により青少年ボランティア育成活動に取り組んでいきたい。

★基本施策3 地域福祉に取り組む団体への支援

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★「たくましい久保っ子」というすばらしい組織はあるが「たくましい久保っ子」に育ててもらった親も組織任せで無関心である。
- ★身近に相談できる体制をつくり、行政に繋げられる民間団体などを育成する必要がある。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★久保地区福祉協議会を中心に、積極的に支援する。

基本目標3 健康で安心して暮らすための支援体制づくりの推進

I 包括的な相談・支援体制の整備

★基本施策1 生活課題に対応する相談・支援体制づくり

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★相談したいと思ったときに、どこに相談したらよいか直ぐにわかる組織としての仕組みをつくる必要がある。一つの事案でも相談内容が多岐に渡ることが多く、一家庭内で複数人が絡んでいることもある。そういうときにどこに相談したらよいか分かりやすくすることと、相談窓口の一元化は必要だと思う。
- ★市役所に来られない人もいる。電話相談でたらい回しにされない工夫が必要である。縦割り行政の壁をなくし、相談する側に優しい仕組みが不可欠である。
- ★市の福祉と社会福祉協議会の福祉も違いが分からないので、注意が必要である。
- ★一度どこかと繋がることができると、その後のフォローは何とかなるかもしれないが、最初が肝心である。身近なところでの相談窓口が増えると良いと思う。しかし、そのような場所に出向くための交通手段が必要であり、オンデマンド交通など細かなニーズに対応できるものができる良い。
- ★子育て世代には「時間の余裕、お金の余裕、心の余裕」が必要だと思う。核家族化が進み、子どもに関しては対学校のみが相談窓口になっていると感じる。学校の負担が増えるばかりで、長期的なサポートには繋がりにくいような気がする。就園前や中学校卒業後も見据えた長期での見守り体制を考える必要がある。地域での子育てが少しでもできれば、時間と心の余裕が生み出せるのではないかと思う。
- ★さまざまな団体がいろいろな課題に向き合っている。
- ★市や社会福祉協議会などには、いろいろな相談窓口はあるが十分に活用されていないのではないかと思う。相談も受け身ではなく、本当に必要なら個別に回って、困りごとや各種支援に繋げることも大切だと思う。
- ★個人情報の観点から、何かと規制されることが多い。ネット社会になり情報が独り歩きしたり、偽の情報などに振り回されている。協議体ではどのような情報が必要か問題を絞って考え、住民にその必要性を知らせなければならない。
- ★色々な制度を利用できる人はサービスを受けることができ、社会的に孤立することはないが、健康な人とサービスを受けられない人を見つけることが難しい。単身家庭も多くなっており、家に閉じこもる人への対応がない。
- ★民生委員は地域の事を知っていると思うが、情報を共有することは守秘義務がありできない。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★自分から相談しようと思う人ばかりではないので、周りの人が困り事に気付けるかどうかも重要である。
- ★公民館を核とし、個々の団体や行政など連絡相談しながら問題の解決を図る。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★コミュニティ・スクールの推進応援隊として呼び掛けを行う。
- ★久保地区は、地域の結びつきが強い地域であると思う。高齢者世帯や単身世帯が増加しているため、民生委員・児童委員、福祉員など、地域福祉推進のリーダーの方々が活用できるような「ひとり暮らし高齢者マップ」を個人情報に注意しながら作成していくと良いのではないか。

★基本施策2 見守り活動の充実

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★見守り隊やスクールガードによる登下校の見守り活動はできているように思う。
- ★個人情報保護の関係もあり、拒否される人もいる。
- ★見守りが必要な人もいるが、隣近所との折り合いが悪い人も多い。
- ★共稼ぎの家族が多くなっており、また、子どもを一人にしたくない考え方の親が増えており、学童保育を高学年まで拡充する必要があるのではないか。
- ★子どもが犯罪などに巻き込まれないよう各種見守り活動を行っているが、小学生の間は「児童クラブ」を活用できないかとの話がある。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★農作業や買い物の行き帰りなどで気を配る。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★自治会で高齢者や子どもたちに声掛けをする。

★基本施策3 認知症の人や家族に対する支援の充実

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★認知症の家族について、気付かれたくない、恥ずかしいと思い、自分で（家族内で）解決すべきと思っている人も多い。そこをいかに見つけ出せるか。日頃からの近所付き合いや多くの人との関わりなどが大切である。
- ★認知症の人が散歩されていても、その人が認知症であることはなかなか分か

らない。声掛けや早期発見する方法が課題である。

- ★認知症の人の意志と家族の葛藤は相反するところがあり、認知症が進むと自分の親の変化に耐えられなくなり、精神的にきつくなる。
- ★認知症が初期の段階で「物忘れ外来」などの受診を勧めることができないだろうか。
- ★認知症の人は他者との交流が上手くできなくなり、孤立する傾向がある。単身世帯が増えており、地域では見つけにくい。

基本目標3 健康で安心して暮らすための支援体制づくりの推進

II 自分らしく生き生きと暮らせる体制づくり

★基本施策3 社会参加の促進と生きがいづくり

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★男性の参加者が少ない。
- ★昔遊びなどを伝承するなど、高齢者の知識経験を伝える活動をしているが、高齢化しており継承者がいなくなる。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★自分は何ができるかを見つめて、やれることからやっていく。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★社会参加や生きがいづくりのニーズを洗い出し、必要なものやできそうなことなどの機会を与える。

★基本施策4 生活のニーズに応じたサービスの提供

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★スーパーの販売車などが来ている。
- ★サービスの提供には行政からの支援も必要となる。ボランティアだけに頼ることはできない。
- ★久保地区は公共交通機関を利用するには奥深い地域も多いので、福祉タクシーなどを検討する必要がある。
- ★高齢化により、通院、買い物に行く手段がなくなっている。
- ★ごみ出しが難しい人がいる。

基本目標4 災害に備えた避難支援体制づくりの推進

★基本施策1 要配慮者避難支援体制づくりの支援

◆◆ 現状と課題 ◆◆

- ★自治会単位で自主防災組織は立ち上がっている。
- ★自治会長、自主防災組織の防災担当者が、出来事、高齢者の様子、災害の状況などを把握する必要がある。
- ★災害などにおいて、連絡がスムーズにできる体制を整えないと組織があっても機能しない。
- ★どのような防災備蓄品があるのか、どこに置いているのか、災害時の会員の行動など、自主防災組織の会員にも教える必要がある。
- ★地元消防団、自主防災組織、久保地区 CP 隊などの連絡協議会を組織し、情報の共有を図る。久保地区内で繋がりを持つことが必要である。
- ★自主防災組織の継続と必要性を、行政が体制の長となる人に勉強会などを通じ伝える必要がある。
- ★自治会名簿も共有されていない状況で、家族の情報を得る手段がない。隣の事でもプライバシーがあり、踏み込めない。
- ★要支援者の情報の共有ができていない。
- ★要支援者をどのように、どこに避難させるかシミュレーションできていなければ、戸惑うばかりで何をしてもよいかわからない。
- ★避難したときの情報のフィードバックはどのようにするのか。
- ★災害時は、まず自分と家族の安全を確認してから他者に対して行動を起こすことになる。何ができるか、その場に直面しないとわからない。
- ★福祉避難所を知らない人がおり、災害時の避難支援体制づくりを推進していくにあたり、福祉避難所の周知を徹底していく必要がある。

◆◆ 一人一人ができること ◆◆

- ★地域の防災訓練に参加し、日頃から災害に対する備えの意識を高める。
- ★常に身近な災害の発生を想定し、避難の方法などを家族で良く話しておく。

◆◆ 地域ができること ◆◆

- ★自治会、自主防災組織や関係団体と避難要支援者の情報を共有する。
- ★自治会、自主防災組織での最低限の連絡網の必要性を理解してもらう。
- ★自主防災会などの勉強会や訓練を行う。
- ★いざというときに、リーダーシップを取れる人を選んでおき、組織化して、危機管理、避難行動訓練などの勉強会を開く。
- ★要支援者の避難の支援、手助けを了承している人は支援が届くと思うが、そ

れ以外の方は、自主防災組織のあるところは、自主防災組織に登録しておくことで良いと思う。登録をためらう人をどうするのが課題である。